

脳・神経の
病気

パーキンソン病

パーキンソン病とは

パーキンソン病とは、脳から発せられる運動の指令がうまく伝わらなくなつて運動障害が生じる病気です。1817年にイギリスの医師ジェームズ・パーキンソンによつて初めて報告された。中脳の黒質という部分にある神経細胞が減ること、そこで作られるドーパミンという神経伝達物質が減少し、体を円滑に動かすための指令が脳から筋肉に伝わりにくくなつてさまざまな障害が生じる。55歳くらいから70歳くらいで発症す

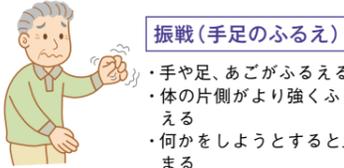
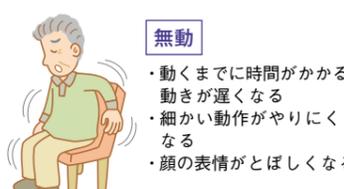
ることが多いが、20代から80代まで幅広い年代での発症が報告されている。およそ1000人に1人くらいの方がこの病気にかかることとされ、日本には14〜15万人くらいの方がいるといわれている。病気の原因はわかつておらず、国の特定疾患に指定されている。

主な症状は4つ

パーキンソン病の主な症状は大きく4つに分けられる。まず1つは、手足のふるえ(振戦)。約半数の人がふるえから発症するとされ、初めは左右どちらか片側の手や足にふるえが出るようになる。神経・脳卒中科の武田正中准教授によると、「静止時振戦といつて、例えば手をひざや机に置いてあるなど何もしていない時に、丸薬を丸める、あるいはお札を数えるような運動が出現し、それがやがて反対側の手足にも広がっていきます。字を書く時など何かをしようとするときふるえが止まるといのが典型です」。2つ目は、

筋肉が硬くなる筋強剛。筋固縮ともいわれ、医師が患者さんの手首やひじを持って動かすと、スムーズに動かずカクカクとした感触がある。3つ目は、動作が遅くなつたり少なくなつたりする無動と呼ばれる状態。動作が緩慢になり動くのに時間がかつたり、顔の表情がたたくなくなった。4つ目は、姿勢反射障害と

■パーキンソン病の主な症状

 <p>振戦(手足のふるえ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手や足、あごがふるえる ・体の片側がより強くふるえる ・何かをしようとするとき止まる 	 <p>筋強剛(筋固縮)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医師が患者さんの手を動かすと、カクカクとした抵抗感がある ・動作がごちかなくなり、手足がしびれることも
 <p>無動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動くまでに時間がかかる、動きが遅くなる ・細かい動作がやりにくくなる ・顔の表情がとぼしくなる 	 <p>姿勢反射障害</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立った時の姿勢が前かがみになる ・小股、すり足になり、足が前に出にくくなる ・少しバランスを崩しただけで転倒してしまう

呼ばれ、姿勢が前かがみになり、バランスがとりにくくなつて転びやすくなる。このような運動に関連する症状がパーキンソン病の4大症状だが、近年では、運動症状が出る前から、匂いがわかりにくくなる嗅覚障害や便秘、夢の内容に反応して体が動いてしまうレム睡眠行動障害などの症状が出ていることもわかってきている。

パーキンソン病とよく似た病気

診察では、どのような症状がいつ頃から出ているのかを確認していくが、パーキンソン病とよく似た症状が出る別の病気が原因ということもあるため、まずは神経内科の専門医にかかることが重要だ。症状がよく似ているけれども別の病気であるもの、パーキンソン症候群(症候性パーキンソンニズム)という。まず挙げられるのが脳血管性パーキンソンニズムと呼ばれるもので、脳梗塞などが原因となつて生じているため脳の画像検査を行つて鑑別をする。飲んでる薬が原因で症状が出ることもあり、これは薬剤性パーキンソン

ニズムと呼ばれている。診察を受ける際には、服用している薬をすべて医師に伝える必要がある。他にも、正常圧水頭症、進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症、多系統萎縮症などの病気でも同じような症状が見られるので、場合によっては入院のうえ種々の検査を行つたり、薬を飲んでみて効き具合を確かめたりしながらパーキンソン病との鑑別を進めていくことになる。

薬物療法が基本

治療の基本は、減つてしまったドーパミンを薬で補う薬物療法になる。武田准教授は「完治する病気ではないものの、薬が非常に有効な病気なので、診断・治療を受けること



神経・脳卒中科
武田 正中 准教授

が重要です」と話す。手足がふるえる、動作が緩慢になるなどの症状が出て生活に不便が生じてても、ドーパミン補充療法で症状は改善する。主な薬は2種類あり、1つは脳の中でドーパミンが変わるLドーパ製剤。もう1つは、ドーパミンを受け取る受容体の働きを活発にするドーパミン受容体刺激薬(Lドーパミンアゴニスト)だ。とくに発症早期には薬がよく効き、日常生活には不自由がなくなる人が多いという。ただ、Lドーパ製剤を長期にわたつて服用し続けると、薬が効かない時間ができるようになったり(ウェアリング・オフ現象)、体が勝手に動いてしまつたり(ジスキネジア)するようになるため、ドーパミンアゴニストと併用したりほかの種類の薬と組み合わせたりするなどしてコントロールする。「パーキンソン病の治療は診療ガイドラインを頭におきながら、仕立て屋さんがその人に合った服を作るように、私たちも患者さんが日頃どのような生活をされているかしっかりと聞きしうえで、患者さん一人ひとりとつて何が最善かを一緒に考えてテーラーメイド治療を行つ

ていきます」。Lドーパ製剤を5〜10年と長期間服用してウェアリング・オフ現象やジスキネジアに困るようになってきた場合には、70歳以下で認知機能障害・精神疾患がなければ深部脳刺激療法という外科的手術が行われることもある。これは、脳に電極を埋め込んで電気刺激を与えるもので、薬物療法と合わせて行うのが一般的だ。また、進行を遅らせるためにはストレッチや姿勢の矯正訓練なども効果があり、兵庫医科大学病院では連携病院とも協力しながらリハビリテーションの指導も実施している。

気になったら神経内科へ

兵庫医科大学病院の神経・脳卒中科では、治療はもちろん、兵庫医科大学リハビリテーション学部との共同研究をはじめとしたさまざまな研究や新薬の治験などを通じて、パーキンソン病の患者さんのサポートに努めている。武田准教授は「症状が進行してしまつてからでは内服治療の効果が低いともいわれているので、気になる症状があつたらまず

神経内科を受診してほしい」と話す。患者さんからは「普通に仕事をしてもいいのでしょうか？」などと聞かれることも多いというが、「パーキンソン病には有効な薬がありますし、してはいけないことなどありません。一緒に治療に取り組んで、今までと同じ生活をすることを目指してもいいし、趣味やスポーツ、社会活動などにも積極的に参加してほしいと思います」。

■脳の構造

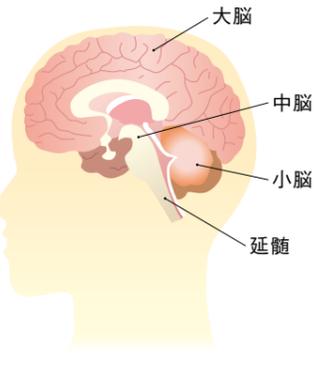
中脳の断面図

○正常な脳



パーキンソン病の場合、黒質(黒質)の細胞が薄くなり、色が薄くなります。

○パーキンソン病患者さんの脳



がん

目・耳・鼻・口の病気

胃・腸・食道の病気

呼吸器の病気

骨・関節の病気

脳・神経の病気

皮膚の病気

肝臓・すい臓・胆嚢の病気

腎臓・泌尿器の病気

循環器と血液の病気

全身の病気

こころの病気

女性の病気

子どもの病気